

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 川津 彩可

本論文は、古代ギリシア建築のなかでも「ドリス式建築」に着目し、神殿建築の上部構造と木材の関係について、多様な観点から論じた建築史研究である。

古代ギリシアの石造建築は、「木造起源説」の観点から、その起源や発展について語られてきた長い歴史がある。本研究では、そうした「木造起源説」の研究史的な整理を前提としながら、石造の古代ギリシア建築と木材の実際の関係性を装飾と儀式、構法と空間構造など、多面的に論じている。

本論は、序章、第1章～第5章、結章からなる構成となっている。以下、各章の内容を概観する。

序章は、1～3節の部分からなり、それぞれ本研究にとって重要な内容である。第1節「研究の背景1：ウィトルウィウスの「木造起源説」と始原の小屋」は、古代ギリシア建築の研究史の整理であり、いかにギリシアの建築が木造起源という観点と強く結びついて論じられることが多かったか、ということを描きながら、西洋建築史学の歴史そのものと、古代ギリシア建築研究が強く結びついてきたかということが示された。第2節「研究の背景2：同時代の中での木造起源説とドリス式の柱・梁」では、古代ギリシアの時代背景の中で、実際に「木造」ということがどのような意味を有したのか、改めて多様な論点が整理された。中でも重要な論点が、ドリス式建築に見られる装飾要素と木造起源説との関係という観点であり、トリグリフ・メトープの装飾に対する着眼の重要性が改めて指摘された。一方、もう一つの重要な論点は、古代ギリシアの実際の石造建築の中で、小屋組を中心とする「上部構造」は木造であり続けたという点である。西洋の石造建築において、屋根構造が一般に木造であることは改めて指摘するまでもないが、そうした石造建築の伝統が、古代ギリシア建築から始まっていた点と、木造起源説の問題を結びつけて論じた研究は、これまであまりなかった。第3節「研究の目的・方法と論文の構成」では、以上のような研究上の視座を踏まえながら、本研究の研究方法、具体的には①実際の遺構における素材、意匠、空間、構造の分析、②文献資料を用いた古代ギリシアの樹種の使い分けの分析、③後代

の改変事例を通じた上部構造部材の特性の分析、④トリグリフの装飾的意匠に着目したその類例分析、⑤植民活動と信仰・建設活動・住まいの分析などについて整理された。

第1章では、本土ギリシアと西方ギリシアなどを含む大ギリシア（マグナ・グラエキア）に拡がるドリス式建築のエンタブラチュアに着目し、その上部構造に現れる違いの分析が行われた。具体的には神殿の壁のスパンや、上部に登るための内部階段の分析が行われ、あわせて本土ギリシアで発展した天井形式についての考察も行われた。従来、個別の遺構研究では、スパンや内部階段に関する研究も精緻に進められてきたが、スパンと内部階段を横断的に分析し、全体像を複合的に分析することで、木造の上部構造と、ギリシア神殿の空間構造の関係性についての新たな視座が示された。

第2章では、一転して古代ギリシア世界全体のさまざまな文字史料を用い、建物の木部と樹種についての記述の網羅的な蒐集が行われた。扱われた文字史料は、文献から碑文まで多様であり、必ずしも一貫した文字史料ではないが、柱や梁、小屋組のような建築構造に関するものから、扉、窓枠のような建具、現場の道具、そして家具や彫像、さらには船や橋に至るまで、さまざまな「木造」の部材や制作物について、古代ギリシア人がその樹種とともに記述を残してきたことが明らかにされた。貴重な文献調査であると同時に、樹種と使用対象との相関関係もある程度指摘できることがわかり、古代ギリシアにおける「木材」を論じる上での重要な研究となっている。

第3章では、アテナイのヘファイストス神殿の建設と、中世ギリシアにおける改築、改変の経緯から、古代ギリシア建築の上部構造の特質を明らかにしようとしたケーススタディが行われた。ヘファイストス神殿は、本土ギリシアにおける重要なドリス式神殿の事例であるが、中世を通じてはキリスト教の教会堂に転用される。その際にもともとの屋根と天井が大きく改変され、ヴォールト天井へと改変されるが、本章ではその改変を部材単位で丁寧を追うことで、もともとの上部構造や、改変による上部構造の活用などが明らかにされた。

第4章では、いくつかの事例が知られる、あたかもトリグリフとメトープのみで構成されたドリス式建築のフリーズ部分が地面に置かれてつくられたかのような装飾を備えた祭壇の遺構の分析が行われた。伝統的な「木造起源説」においては、ドリス式建築のフリーズ部分で見られるトリグリフ・メトープの装飾要素こそ、ギリシア建築が「木造起源」であることを示す重要な証左として扱われてきたが、同様の装飾が地面に置かれた祭壇でも見られることが何を示すのか、そもそも祭壇はどのように用いられ、どのような類型が存在し、トリグリフを有する祭壇がどのような地域で見られるのかなど、多面的かつ基礎的な研究整理がなされた。

第5章では、ここまでの神殿建築およびその部分に関する研究から視野を広げ、古代ギリシアの植民活動と、そこでの都市建設や住宅建設などについて、主として現地調査に基づきながら、さまざまな事例研究が行われた。本章で扱われた範囲は、「ドリス式建築」や「木造起源説との関係」といった限定的な研究範囲を超え、古代ギリシアにおける建設活動とそこでの信仰、儀礼、生活を幅広く扱うものであったが、第1章から第4章までの仮設的な枠組みに対して、フィールドワークに基づく具体性が示されたといえる。

結章では、以上で論じられてきた、木造起源説との関連から古代ギリシアのドリス式建築を、特に上部構造に着目することで論じたことの意義や問題点などが示され、全体の結論となっている。

以上のように本論は、古代ギリシア建築という古代地中海世界で大きく発展し、西洋建築の歴史的起源として扱われる重要な研究対象でありながら、限られた建築遺構と文字史料によって論じることしかできない難しい研究対象に対して、「木造起源説」と「上部構造」という観点からいくつもの新たな視座をもたらした独創的な研究であり、西洋の古代建築研究として重要な成果をあげたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上